

フィールドワーク参加報告

取り残されたコリアンを訪ねる旅

サハリン残留韓人の証言と関係研究発表を聞いて

小西和治

2010 年 7 月、関西から 4 人でサハリンを訪問した。6 日間のサハリン訪問だったが、市庁舎や郊外の別荘で韓半島出身者(以下コリアン又は韓人)の貴重な証言を聞くことが出来た。また、サハリン国立総合大学でのシンポで聴いた慶北大学・金昌祿教授などの発表も印象に残った。お世話になった運転手の鄭(チョン)さんの波乱万丈の 62 年間の生涯は、もっと深く教えていただきたかった。

韓国語理解力の不足、ロシア語知識の欠如の中、重要事項の通訳や、日本語訳のレジュメに頼りながらの聞き取りではあったが、それらは、私が書物や映像を通して学んでいた事実をはるかに超える衝撃的な内容であった。参加者 4 人で学んできたこと、旅行中に聞いた話の要点などを以下にまとめたい

K I N と海外同胞財団

サハリン残留韓人問題については K I N (Korean International Network・

)=在外韓国人支援市民団体等の努力もあって韓国市民の関心が高まり、今年の夏には韓国外交通商部傘下の機関の在外同胞財団が主管して「サハリン強制徴用韓人の昨日、今日そして明日」という 500 人規模のシンポを



サハリン国立総合大学でのシンポジウム

ユジノサハリンスクで開催するに至っている。

このシンポの参加者である超党派の韓国国会議員 6 人、学識経験者、マスコミ、政府関

係者など 55 人の韓国側メンバーのスタディーツアーに我々 4 人も加えていただいた。ツアーの内容は、南サハリンの慰霊碑・記念碑巡り、残留韓人の証言聞き取り、子どもたちの教育現場の見学が中心だった。

一方、K I N はプサン大学生のボランティアや実態調査の活動のコーディネートと支援をサハリン現地でも行っていた。その内容は、韓人文化センターでの子ども向け母国文化教室の講師と、国立墓地での韓人たちの墓標調査である。これらの活動の一部に合流し見学で



他郷で無念に逝った方の墓標調査

きたのも貴重な体験だった。

帰郷不能に追込まれた強制徴用韓人

植民地時代に韓半島からサハリン島へ移住を強いられた人たちは、ソ連軍侵攻直後の北海道への住民緊急疎開の対象外とされた。そして、日本敗戦後も故郷への帰還の夢は叶えられず、極北の地での残留生活を余儀なくされ、4 万 3 千人いたとされるコリアンの帰郷のための努力を日本は一切行わなかった。帰郷のために、サハリン南端の「稚泊



コルサコフ市「望郷の丘」慰霊碑

連絡船」の出航地であったコルサコフ(大泊)に集まったコリアンは、最後まで稚内行の帰国船に乗ることを拒絶され続けた。政府は日本列島出身の日本人「引き揚げ」のためには最善をつくし、約40万人のほぼ全員が帰還出来たのと好対照である。

「何故、私たちの父母は帰郷出来なかったのか。今からでもいいから一家で帰らせてほしい」という韓人たちの叫び声が耳に残る。

日本人による韓人集団虐殺事件の続発

ソ連軍侵攻時には「朝鮮人はソ連のスパイだ」というデマによってレオニードヴォ(上敷香)やボジャルスコイエ(瑞穂)等で、日本人が韓人を集団虐殺した事件は、事実の調査が完了して

おり、(上敷香で男性18人を、瑞穂で妊婦や子どもを含め27人を無差別殺害)国連に真相調査を促す決議案も発議されている。国連人権委員会による事実調査や関連当



ボジャルスコイエ虐殺追悼碑
と碑文をメモする李離和さん

事国への聞き取り調査、関係者の処罰そして、日本が拒んでいる補償問題の解決へと進展する可能性が高い。

しかし、「スミルヌイフ(旧気屯)、ウゴルゴルスク(旧恵須取)などの地方で、朝鮮人が日本憲兵、在郷軍人それに極右分子によって殺害されたという」(『サハリンから

のレポート』)事件については、事実の確定もまだ出来ていない。その他にも住民を巻き込んだ地上戦・支配勢力転換に伴う様々な悲劇が各地で続発している。

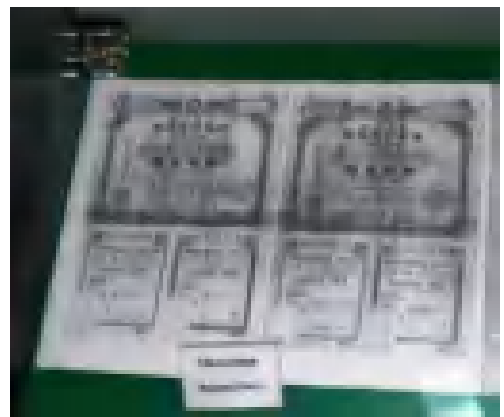
韓人帰還運動と新たな離散家族問題

日帝時代、植民地朝鮮から「新婚の夫がサハリンに徴用され、妻は生死不明の夫の帰りを待ち続ける」というケースが典型的な離散家族問題だった。この問題の解決のためには、在サハリン韓人の永住帰国実現が不可欠であったが、それは叶えられなかった。

苦難と絶望の歴史を経て、1956年の日ソ国交正常化後に、日本人妻を持つ韓人夫とその子のみが(合計約2千3百人)がサハリンからの帰還を果たした。この事業で日本に定住した朴魯学と妻の堀江和子が1958年頃からはじめた残留韓人帰還運動等が日本の世論を盛り上げていった。しかし、その他の圧倒的多数の韓人は取り残されたままという状態が続いた。金昌祿教授の研究発表では「韓国人被害者の清算要求がはじまり、日本での訴訟と立法運動も展開された、しかし2010年現在、その努力は依然として十分な実を結ばずにいる」という。



ホルムスク峠
ソ連戦勝記念碑



戦時貯蓄債券(韓人歴史資料館展示より)

現在、日韓両国政府の支援もあって約3千7百人の韓国への永住帰国が実現している(大韓赤十字社2009年発表2,944人に、2009年発表後の永住帰国者をKINが調査した数字、金海市95人、梁山市76人、烏山市105人、陰城郡68人、坡州市96人、天安市99人、の539人と、2010年前半の堤川市と舒川郡、228人を加えて総計3,711人)。

しかし、これで問題が解決したわけではない。ホルムスク市役所で行われた、残留韓人の聞き取り調査でも、様々な問題を当事者は涙ながらに訴えていた。「帰国が認められたの



ホルムスク市役所
での残留韓人の証言

は敗戦以前からサハリンにいた1世のみで、戦後生まれの韓人は対象外である。そのため、夫婦や親子が一緒に住めないという、新たな離散家族問題が発生している」という。また、家族再会のための一時帰国の困難さ、

韓国では支払われないロシアの年金の問題、強制労働未払い賃金問題、軍事郵便貯金引き出し問題など、在サハリン韓人たちの生存権は理不尽に制限されたままである。

在サハリン韓人の子どもの教育問題

在サハリン韓人の歴史・現状をみると、在日コリアンと多くの類似点があることがわかる。ただ、異郷に定住を余儀なくされるに至った経緯が、前者は全く恣意を許されないものであり、後者の一部には自主帰国のチャンスが一時的に存在したが様々な事情でその機会を逸して帰国不能に陥った、という強制的な度合いに若干違いがあるに過ぎない。

サハリン韓人の国籍は、ロシア国籍、北朝鮮(共和国)国籍、無国籍に分類出来、3世4世の中にはロシア人との結婚も増えてきている。また、母国語が理解できない子どもたちも増えている。このような子どもたちの母国

語・母国文化教室も見学することが出来た。

ユジノサハリンスクでは、プサン大学生や地元の青年のボランティアが講師を務



韓人文化センターのオリニ学校

める夏季学校の活動を見学出来た。夏季休暇期間中の毎日、同胞の子どもたちが集いサハリンや韓国の先輩から母国について学ぶ子どもたちの生き生きとした顔が印象に残った。

ホルムスクでは、地元の大韓キリスト教会の運営するハングル学校を見学した。港を見下ろす高層アパートの一室を市から無償で貸与されて、牧師夫人がボランティア講師をして運営されていた。「何故、韓国語を勉強するのか?」という質問には「アボジが韓国人だから」「将来は、韓国で働きたい」などと、眼を輝かせてロシア語で答えていたのが印象に残った。



ホルムスク市内のハングル学校

た。それぞれの教室に通っている子どもたちは、一握り

であり、母国文化を学ぶチャンスのない子どもが多数存在することが想像出来た。在日コリアンの子どもの教育問題に関わっている筆者にとっては、ここにも類似点があることに複雑な思いを抱くとともに、献身的に関わっておられるスタッフに近親感を持って見学した。

サハリンでの同行者と東京で再会

この8月22日に東京で「韓国強制併合百年日韓市民共同宣言大会」があり、その後ソウルでも開催された。その韓国側の代表は今度の旅行で同行した李離和さんだった。また、

2010.9.26

サハリンから帰国した韓人とともに KIN のスタッフも東京大会に出席するというので、再会のために、サハリン旅行の 4 人で東京に出かけた。日韓市民共同宣言大会の基調講演で庵道由香さんは「朝鮮人にとって、植民地の支配者である日本は『日常』だった。自ら過



共同宣言大会の李離和さん

酷な経験をした世代はもちろん、その子や孫も身内の体験談に接してきたから、植民地支配を実感している。一方、日本人にとっては、朝鮮は新たな日本の領土であっても、遠く離れた『実感のない存在』だった。だから、・・・植民地支配による被害を具体的に想像することができない。こうした体験と伝承の格差に、教育の格差が加わる。・・・隣人としてコミュニケーションを取っていく前提を欠いている、と言わざるを得ないのではないか。」と指摘していた。(共同通信 2010 年 08 月 26 日「時言」)

菅首相談話と「サハリン教材」の整備

併合 100 年を前に、菅直人首相は「その意に反して行われた植民地支配によって、国と文化を奪われ、民族の誇りを深く傷付けられました。・・・また、これまで行ってきたいわゆる在サハリン韓国人支援、朝鮮半島出身者の遺骨返還支援といった人道的な協力を今後とも誠実に実施していきます。」と、韓国人に謝罪し支援の継続を約束した。これは、小泉首相が 2005 年 6 月に訪韓し、盧武鉉大統領に「朝鮮半島出身者の遺骨の調査・返還、在サハリン韓国人や在韓被爆者に対する支援等の過去に起因する問題への対応を人道的観点から可能な限り進める」との発言を受け、若干深化させたものであろう。

これらの謝罪や支援は、現代史を十分に教えられていない日本人にとっては、日本の侵略とそれに対する民衆の抵抗を詳しく学んだ韓国人とその歴史認識を共有出来ず、首相談

「むくげ通信」242 号(12)

話は空論になってしまう。

植民地支配・加害の歴史の学習のための教科書や副読本でスッポリと抜けているのがサハリンの歴史と現状だろう。学校でサハリンを学ぶ事が出来るようにすることが、隣人の心情に心をはせ、菅首相談話を実体化することに繋がると、いま考えている。

一方、より多くの方々が現地を訪問し、韓人の皆さんの生の声を聞いていただきたいと、第二回サハリンツアーの来年 8 月下旬実施を追求している。



犠牲同胞慰霊塔

残留韓人の「恨」に触れた旅日記

- 1 日目**・午後 9 時ウラジオストク航空でユジノサハリンスク着。午後 10 時になってもまだ明るい。親切な人が多い。
- 2 日目**・韓人文化センターでプサン大学生のボランティア活動と犠牲同胞慰霊塔見学。国立墓地墓碑調査に体験参加。KIN の参加者、呉忠一さん、李離和さん等と夕食交流会。
- 3 日目**・コルサコフ市「望郷の丘」慰霊碑見学。「サハリン強制徴用韓人の昨日、今日そして明日」国際シンポ(於 国立サハリン総合大学)に参加。開会式で紹介を受ける。
- 4 日目**・ボジャルスコイェ(瑞穂)の虐殺追悼碑で献花、見学。ホルムスク市役所で残留韓人の証言聞き取り、冒頭に紹介される。同市ハングル学校の授業・学習発表を見学。
- 5 日目**・離散家族会事務所訪問。ユジノサハリンスク在住韓人別荘で政界人らと野外バーベキュー、証言を聞く。
- 6 日目**・在サハリンコリアン向け唯一のメディア、新コロヨ新聞社を訪問。新聞社の歴史等を聞く。午後 1 時半、ウラジオストク航空で帰路につく。考える事の多い旅だった。

